

令和2年度は、新型コロナウイルス感染流行の影響を大きく受けることになった1年間でした。

すでに2020年の1から3月は影響が出てきておりましたが、令和2年度に入り、年度初めの4月から2か月間は、新型コロナウイルス流行拡大に対する緊急事態宣言発令を受けて、病院機能を一時的に縮小せざるを得ませんでした。国および県の方針の下で、周産期医療やがん診療など、当院がコロナ禍でも維持しなければならない機能の継続を基本方針として、院内で話し合いを重ね機能縮小プランを作成し実施いたしました。またこの時点では感染予防の医療資材の全国的な不足が生じておりましたので、予定していた手術なども、可能と判断されるものについては延期するなどの対応を致しました。外来診療についても、院内での密な状態を軽減するために、外来予約の制限や電話診療での代替なども行いました。院内の感染対策として、入院の面会の厳しい制限をお願いするとともに、特別支援学校の授業もお休みとなり、保護者の方の宿泊施設であるドナルド・マクドナルド財団のさいたまハウスも一時閉鎖となりました。こうした様々な対策については、患者さんとそのご家族のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

2020年6月になり、徐々に診療をもとに戻すことができましたが、その後も第2波、第3波と流行は続きましたので、感染対策室を中心に感染予防に細心の注意しながら診療を続けました。発熱などの症状の患者さんは新型コロナウイルス感染の可能性がありますので、感染の疑いがある間は、医療スタッフは感染予防の個人用防護具をつけて個室隔離での診療を行う必要があり、心身への負担には大きなものがありました。なお、当院は新型コロナウイルスに感染した中等症以上のお子さんの入院が必要になった場合には入院対応する役割になっております。小児での重症化が非常に少ないことから、年間を通して陽性のお子さんの入院は少数でしたが、小児看護ではどうしても密接な対応が求められ、担当する医療者への負担はやはり大きなものがありました。

その他、院外への貢献としては、新型コロナウイルス陽性者の宿泊施設となったホテルへの医師と看護師の派遣、クラスターが発生した介護施設などへ医師と看護師を感染対策の指導目的で派遣、新型コロナウイルス感染の診療を行っている県立病院への看護師の応援派遣なども行いました。

こうした新型コロナウイルス感染自体の直接的な影響だけでなく、こどもたちの生活の変化に伴う感染症や外傷の頻度の低下からくる小児医療全体の需要の落ち込みなどの間接的な影響も受けることになり、令和2年度の診療実績は感染対策などによる診療の制限と一時的な小児患者の減少を反映するものとなりました。具体的には、入院延べ患者数は82,361人で、前年度より11,733人(12.5%)減、病床利用率は71.4%で、前年度より10.0%(12.3%)減となっております。平均在院日数は12.6日で、前年度とほぼ同じ水準で維持できております。手術件数は3,377件で、前年度より230件(6.4%)の減少となりました。一人当たりの稼働額単価は105,968円で、前年度より8,152円(8.3%)増となっていました。外来診療においては、新患者数が11,425人と、前年度に比べて1378人(10.8%)と大きく減少し、外来延べ患者数も127,500人で、前年度に比べて14,066人(9.9%)減少し、特に救急部門の患者さんの減少が顕著でした。

令和元年度より開始された肝臓移植治療は、さいたま赤十字病院にご協力をいただき、ドナー手術はさいたま赤十字病院でお願いし、レシピエント手術は当院で実施するという2施設での臓器移

植医療の体制となっております。移植外科のスタッフが中心となり、小児外科、形成外科等複数の診療科の医師が協力し令和2年度は7件の肝臓移植を無事行うことができました。また、ゲノム医療については、難治性あるいは再発性の急性リンパ性白血病やリンパ腫に対するCAR-T細胞療法が令和2年度より開始され、遺伝子操作を加えて治療効果を持たせた免疫細胞を患児に戻すという治療を開始する行うことになりました。また県立がんセンターのがんゲノム医療連携病院として、がん遺伝子パネル検査も11件実施しており、今後もこうしたゲノム医療を推進していく所存です。そのほかにも、当院が実施しております高度医療については、大きな影響を受けることなく継続することができたものと思います。

以上、埼玉県立小児医療センター年報（2020年版）をお届けするにあたり、当センターの概要をご報告申し上げます。職員一同一丸となって、安心・安全な医療、高度医療、地域と連携した医療を目指して参ります。そのためには、近隣の医療機関、行政機関、地域住民の皆様など数多くの関係各位のご指導が不可欠です。これからもご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

小児医療センター—歴代幹部職員

	センター長		病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1983	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	小笠原昭雄	加藤ミチ子
1984	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	浜野信雄	加藤ミチ子
1985	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	松井雅雄	加藤ミチ子
	総長		病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1986	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	松井雅雄	加藤ミチ子
1987	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	並木武夫	加藤ミチ子
1988	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	並木武夫	加藤ミチ子
1989	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	古橋司郎	加藤ミチ子
1990	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	熊倉 勲	加藤ミチ子
1991	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	大沢 彰	古橋美智子
1992	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	関根隆俊	古橋美智子
1993	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	関根隆俊	古橋美智子
	総長	副総長	病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1994	河野三郎	山本圭子	赤司俊二		関根隆俊	古橋美智子
1995	河野三郎	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔	井上岩三	牧 満子
1996	河野三郎	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人	井上岩三	牧 満子
1997	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	井上岩三	牧 満子
1998	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	石田三郎	牧 満子
1999	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	石田三郎	近藤よし子
2000	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	深谷榮作	近藤よし子
	センター長	参事	診療局長	診療局副局長	事務局長	看護部長
2001	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	深谷榮作	上原敦子
		参事	病院長	副病院長	事務局長	看護部長
2002		山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	北村富士雄	上原敦子
2003		山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人	北村富士雄	野中甲子
2004			赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、野中甲子	渡辺春男	野中甲子(兼)
2005			城 宏輔	佐藤雅人、大野 勉、花田良二、野中甲子	渡辺春男	野中甲子(兼)
2006			城 宏輔	大野 勉、花田良二、中村 譲、野中甲子	陣内 博	野中甲子(兼)
2007			城 宏輔	花田良二、中村 譲、西本 博	陣内 博	柏浦恵子
2008			城 宏輔	花田良二、中村 譲、西本 博	堀越久夫	柏浦恵子
2009			城 宏輔	花田良二、中村 譲、西本 博	堀越久夫	小木曾國子
2010			中村 譲	花田良二、西本 博、大石 勉	堀越久夫	小木曾國子
2011			中村 譲	花田良二、西本 博、大石 勉	北村芳之	小木曾國子
2012			中村 譲	花田良二、西本 博、大石 勉、西ヶ谷正子	北村芳之	西ヶ谷正子(兼)
2013			中村 譲	花田良二、西本 博、大石 勉、西ヶ谷正子	笠原 実	西ヶ谷正子(兼)
2014			中村 譲	花田良二、小川 潔	笠原 実	黒田京子
2015			岩中 督	花田良二、小川 潔	森 美秀	黒田京子
2016			岩中 督	花田良二、小川 潔、望月 弘	森 美秀	黒田京子
2017			小川 潔	望月 弘、渡邊彰二	阿部 隆	久保良子
2018			小川 潔	望月 弘、渡邊彰二、小熊栄二	阿部 隆	久保良子
2019			小川 潔	望月 弘、渡邊彰二、小熊栄二、黒田京子	加藤 孝之	黒田京子(兼)
2020			岡 明	望月 弘、渡邊彰二、小熊栄二	加藤 孝之	中田尚子